

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第33回 がんどころではないということ

新しい年、2017年を迎えた。今年80歳を迎える。最近「がんどころではない」ということをよく言っている自分がいる。12年前にがんの手術をして臓器を2つ取り、死を覚悟した時もあった。6年前、糖尿病となり血糖値が500を超え

病氣抱えても東奔西走

検査入院を2度行った。2年前、心筋梗塞になり、急患で病院に飛び込みステントを入れた。2度の入院で爆弾を抱えているようだ。1度目は大分で開催された死の臨床研究会に参加して家に帰った時。2度目は富山の市民公開講座に呼ばれて家に帰ってきた時だった。いずれも家に帰ってきた後だったことが幸いした。それ以来、がんどころでは無くなってきた。がんによる死は突然やってくる。心筋梗塞はがんとは違い、死は突然やってくる場合が多い。従って内科、循環器の定期検査は毎月欠かさず行っているが、がんをあまり意識しなくなってきた。2年前、心筋梗塞になり、急患で病院に飛び込みステントを入れた。2度の入院で爆弾を抱えているようだ。1度目は大分で開催された死の臨床研究会に参加して家に帰った時。2度目は富山の市民公開講座に呼ばれて家に帰ってきた時だった。いずれも家に帰ってきた後だったことが幸いした。それ以来、がんどころでは無くなってきた。がんによる死は突然やってくる。心筋梗塞はがんとは違い、死は突然やってくる場合が多い。従って内科、循環器の定期検査は毎月欠かさず行っているが、がんをあまり意識しなくなってきた。

きいている自分が居る。にも拘らず昨年12月、輪島、金沢、福井に行ってきた。「終末期安心して住める街作り」事業で益田市社会福祉協議会から助成を受けたからだ。輪島市は「みんなの保健室」が開催している事業の視察。がんサロン、認知症Cafe、介護・健康相談などを同じ場所で開催している。金沢市は「元ちゃんハウス」の視察。マジーズハウスを真似た癒しの場。素敵な空間を作り出していた。患者にとって、このような場があれば、いかほど心が癒されることか。

今月1月は、姫路市だ。どうクリニックサロン見学。大頭先生はがんサロン、遺族サロン、絵手紙コーナーなど、沢山の患者支援をしている。西宮市夙川の藤川先生が主宰するがんサロンも見学。自宅を開放したがんサロンで、全国初の取り組みではないか。

さらに1月末、FFJ CP全国大会が東京秋葉原で開催される。2月は久留米市で開催の日本ホスピス在宅ケア研究会に参加予定。

患者も忙しい。懲りもせずはまだ動く。病気になるって暇がない。娘には「いい加減にしろさ」といつも注意されているが止めない。自分にとってこれが「生きる力」となっているのかもしれないから。